

---

# 魔法少女リリカルなのは 魔龍と幻獣と魔獣と

混沌の渦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔龍と幻獣と魔獣と

### 【Nコード】

N6257M

### 【作者名】

混沌の渦

### 【あらすじ】

とある次元震の調査に向かったなのはとフェイト。そこで二人は一人の少年に出会う。そしてそれは新たな戦いの幕開けを告げるものであった。魔法少女リリカルなのは 魔龍と幻獣と魔獣と始まります。

## プロローグ（前書き）

はじめまして！混沌の渦です。素人のため至らぬ事もあるでしょうがよろしくお願いします。！

## プロローグ

J・S事件から1年。機動六課は当初の予定通りに解散するはずだったが、その後ミッドチルダでは次々と不可解な事件が相次いで起きる。

それらの事件では共通の目撃情報が確認されている。それらの情報は目撃者によって異なるが共通点が一つある。それは目撃者が開口一番に決まり文句のごとく口にした。

「大きな黒い龍と金髪の男がいた。」

当然ながら機動六課もその情報はつかんでいたが、犯人に結び付く有力な手掛かりは何一つつかめていなかった。事件は迷宮入りするのではないかと、市民の間で冗談交じりで囁かれ始めた頃、機動六課に次元震発生連絡が届いたのは。

その連絡を受けて高町なのは一等空尉とフェイト・T・ハラオウン執務官はその調査に訪れた先でこの1年間の事件の真実と新たな戦いの始まりを知る事になる。

魔法少女リリカルなのは 魔龍と幻獣 始まります。

## プロローグ（後書き）

本編は次回からです。

## 第一話 謎の少年現る（前書き）

思ったより早くに書けました。では、本編をどうぞ。

## 第一話 謎の少年現る

高町なのは一等空尉とフェイト・T・ハラウン執務官が、次元震の調査にかりだされたのは単なる貧乏くじである。次元震発生の連絡を受けた時間が深夜の2時頃であった事に加え、二人が残業中であつたためそのままかりだされただけである。

だけであると言葉にするのはいいのだが、本人たちにしてみればたまったものではない。もう少しで残業を終わらせて二人で一緒に寝ようとしていたところで、次元震発生の連絡が届いたのである。翌日が休日でなければ盛大に暴れて隊舎を破壊していたであろう。(ただし、その場合は我らが狸の隊長からのお仕置き「胸部マツサージ&お説教」が待っているのだが。)とまあ、前置きはこれぐらゐにする。早い話が二人は苛立つているのである。そろそろ視点を二人に向けるとしよう。

### フリースide

「まったく、なんでこんな時に次元震が発生するのよ!!」

「本当だね。フェイトちゃん。またこんやもヴィヴィオと一緒に寝れないね。」

「そうだよ!また寝れなつかたよ!(なのはと一緒に!)」

フェイトはかなり怒っていた。またもやなのはと夜の本番ができなかったのである。(なのはは知らない。)対するなのはも次元震のせいで三日連続の徹夜をするはめになったのである。

ゆえに、今の二人には近寄りがたいオーラが漂っている。夜行性の動物たちは二人が近寄ってきたら一目散に逃げ去った。そんな

事は露知らず、二人は次元震発生が発生した地点に到着した。

「こちらスターズ01。次元震発生地点に到着。………ロンググアーチ、応答を。ロンググアーチ、応答を！………嘘、通信できない。フェイトちゃんの方は？」

「………だめ。こっちも応答なし、ということとは」

「通信が妨害されて」そのとおりだ「！？だれ？」

二人がロンググアーチへの到着の連絡をとろうとしたが、なぜか通信が妨害されていた。そのことをつぶやこうとしたときにそれはあらわれた。

否、正確に言えば最初からそこには居たのだが、二人に気づかない様に気配を消していたのである。

「ようやく来たか。高町なのは一等空尉、並びにフェイト・T・ハラウン執務官。J・S事件を解決した英雄たちよ。」

金髪の16、7歳ぐらいの少年が二人の名を口にした。

なのはside

「ようやく来たか。高町なのは一等空尉、並びにフェイト・T・ハラウン執務官。J・S事件を解決した英雄たちよ。」

そう金髪の男の子は告げた。歳は16、7歳ぐらいかな？もう春だというのに赤いロングコートを着ている。て、そうじゃなくて！？

「どうしてあなたは私たちの事を「知らない方がおかしいだろう？」



・・・それもそうか。じゃあ、質問を変えるよ。あなたは誰でどうしてここにいるの？ここは危険だよ。次元震が発生したんだよ。」

「誰と言われれば、俺の名はスペクトラ・A・ルーシエだ。それから次元震のことだが問題無い。あれは俺がそつちのレーダーを騙しただけだ。次元震は発生などしてないさ。」

！？今、この子は何て言ったの？レーダーを騙したという事は

「・・・もしもそれが事実ならあなたを公務執行妨害で逮捕します。」

そう言ったのは私ではなくフェイトちゃんだった。

「事実だよ。お前たち機動六課の誰かをおびき出すためにやったのさ。」

機動六課を狙っていたんだ。まあ、理由はともかく・・・、

「へえ、あなたの仕業だったんだ。ふうん。ということは」「

私とフェイトちゃんの声がはもる。

「あなたを私たちの睡眠時間を奪った罪で・・・じゃなくて、公務執行妨害の罪で逮捕します。！！！！」

私とフェイトちゃんの睡眠時間を奪った罪は重いよ！！



## 第一話 謎の少年現る（後書き）

なんか早速、なのフェイのキャラが崩れた感じが・・・後、文章が支離滅裂な気がだれか、文才をください。

## 第二話表 事件の犯人(前書き)

おそらく、本日最後の投稿になります。

## 第二話表 事件の犯人

スペクトラside

睡眠時間を奪った罪って、徹夜でもしていたのか？まあ、それとはかく・・・二人だけか。もう少しおびき出せるかと思ったがそうそううまくいくものでもないか。

（おい、アルザスの召喚師はいないのか、スペクトラ！）

（そう焦るな、ヘリオス。ちゃんと来させる。そのための手はずでにうってあるさ。もうしばらく待てば来るはずだ。）

そうヘリオスをなだめたあと、俺は目の前の敵に集中する事にした。正直、そろそろ避けるのが難しくなってきた。・・・本気を出すとするか。ポケットからデバイスを取り出す。そして、

「プラウディア、セットアップ！」

そう叫びバリアジャケットを身にまとい、右手にプラウディアを構える。

フエイトside

私となのはから睡眠時間を奪った男の子、スペクトラは私のプラズマランサーやなのはのアクセルシューターを必要最低限の動きでかわす。・・・どうやらプロのようだ。動きに無駄と隙がまるでない。

(なのは、この子。プロだよ動きに無駄がない。)

(そうみたいだね、フェイトちゃん。・・・じゃあ、フェイトちゃんは今もう一回プラズマランサーを。左右と後ろは私がアクセルシューターで囲むから。)

(ok、まかせて。)

なのはと念話を交わしたあと、プラズマランサーの準備をしているとスペクトラが季節外れのロングコートのポケットから、赤いひし形の宝石を取り出す。そして、

「プラウディア、セットアップ!」

と叫び、バリアジャケットを身にまとう。さっきまで着ていたロングコートの襟に黒い毛が追加され、背中から四対八枚の赤い蝙蝠のような羽が生えている。右手には刀身が付け根から三つ又に分かれたナイフのようなものを持っている。こちらはオレンジの柄と黄色の刀身、中央に赤いデバイスコアがあしらわれている。三叉槍と呼ばれる槍の先っぽの部分をそのまま持ってきたようだ。

「さて、こうなったら、手加減は出来ないぞ。それでもいいか?」

「望むところよ!」

私たちが睡眠時間を奪った以上、許すつもりはないからね。

「そうか、ならば、プラウディア!」

「ソニックムーブ」

その瞬間、なのはが吹き飛ばされた。

なのはside

あの男の子は一瞬で私の目の前まできてデバイスを振りおろしてきた。

「プロテクション」

とっさにレイジングハートがプロテクションを使ったけど向こうはそれすらまきこんで私を吹き飛ばした。

「なのは!」

フェイトちゃんが叫ぶ声が聞こえた。その瞬間私は何かにぶつかった。

「大丈夫?なのは!怪我はない?」

「フェイトちゃん?ふえ、な、なにしてるの?」

私は今、フェイトちゃんにお姫様抱っこをされている。は、恥ずかしいよ、フェイトちゃん!あの男の子も「なにしてるんだ?」って目でこっちをみてるよ。で、でも、ちょっとうれいかな?

フェイトside

やったー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!なのはをお姫様抱っこできたよ!!

なのはもまんざらじゃないって顔してるよ!!!!でも、あのガキ  
ーよくもなのはを!!!!絶対ぶっ飛ばす!!!!!!

「フエ、フエイトちゃん、ダダ漏れになっているよ。」

「え、嘘???」

「本当の事だ。ミッドの方にまで届くのではないかと思うほどの大  
音量だったぞ。」

えーーーーー!!!!!!なのはを降ろしてから一人落ち込む  
わたしであった。

スペクトラside

「おい、そろそろ続きをしないか?」

俺はそう切り出し二人の注意をこちらに向ける。・・・しかし、  
あの動き、予想ど通りのようだな。

「高町なのは、どうやら、お前の体にはJ・S事件の時のダメージ  
が後遺症となって残っているようだな。」

「「!!!!!!」」

二人とも驚いているようだ。

「・・・どうしてそれを?」

「動きでわかる。見る人間がみればすぐにわかるさ。しかし、そう



なると、ここは他のメンバーを待ったほうがよさそうだな。」

「どういう意味、待ったほうがよさそうって？」

「なに、簡単なことだ。俺の仲間を六課隊舎の方に向かわせてお前たちがピンチだと言わせれば、すぐに飛んでくるさ。」

「「！！！！」」

「・・・おっと、どうやらもうすぐそこまできているようだ。はやいな。まあ、そうでなくては部隊を存続させるために色々と事件を起こした意味がない。」

「！？？どういう事、事件を起こしたって？」

「待って、そういえば、この1年間の事件の犯人の目撃情報って、たしか、えーと、・・・・・・・・そうだ！黒い大きな龍と金髪の男！という事は、あなたもしかして・・・」

どうやら執務官殿の方は気づいたようだ。ならば、言ってもいいだろう。

「そのまさかだよ。執務官殿、俺がこの1年間の事件の犯人だよ。」

俺はそう言い放ち、二人に驚愕をプレゼントしてやった。

## 第二話表 事件の犯人（後書き）

やりすぎた。フェイトが壊れすぎた。なのはも壊れ始めてしまったし。さらには、文章も変になってきた気がする。これからどうしよう。．．．．．

**第二話裏 少女と出勤（前書き）**

批評、批判でもいいので、感想をください。

## 第二話裏 少女と出動

高町なのはとフェイト・Ｔ・ハラオウンが謎の少年スペクトラと戦闘を開始するおよそ２時間前、機動六課の方では侵入者が発見され、フォワード四人と副隊長二人が侵入者を捕縛せんとしていた。

「クソ、ちょこまかとすばしっこいやローだな。」

そうつぶやくのはスターズ０２にして、ヴォルケンリッター・鉄槌の騎士ヴィータであった。彼女がそうこぼすのも無理からぬ事であった。

なにせ侵入者は召喚獣と思われる青い馬のような生物に乗り、機動六課隊舎から訓練場の方へと走っていたのだ。その生物は見た目通りと言つべきなのか非常に足が速いのである。だが、その侵入者と生物に対して疑問を浮かべる者がいた。

「・・・妙だな。」

ライトニング０２、ヴォルケンリッター剣の騎士シグナムであった。

「妙つて、何が妙なんだ？シグナム」

「向こうは本気を出していないように感じる、それに我々が来た時、やつは一瞬だが笑っていたように見えた。という事は」

「罠か。後ろのフォワード連中にも伝えとくか。」

フォワード四人は侵入者が（正確には乗っている生物が）速すぎ

るため、後方から自分たちのペースで追ってきていた。

とまあ、侵入者の罠の可能性を二人が考え始めた時、突然、侵入者が止まった。そこはちょうど訓練場の真ん中あたりだった。当然、二人も急ブレーキをかけざるを得ない。

「このあたりでいいでしょう。」

と、突然、今まで何を聞いても無言を貫き通してきた侵入者が口を開いた。その声は柔らかいソプラノの少女のものであった。

「てめえ、このあたりでって、やっぱり罠かなんか仕掛けていやがったのか？」

「罠などなにも。しいて言えば、あなた方のお仲間がひっかかったと言つべきでしょうか？」

「なに？」

「どついつ意味だ。」

「次元震なんて、起きてはいないということですよ。」

「！？てめえ、まさかなのは達を！」

「貴様、一体何者だ。」

「そういえば、まだ名乗っていませんね。いいでしょう、私の名は」

そういうと、侵入者は今まで着ていた黒いフード付き外套を脱ぎ捨てた。その下からあらわになったのは12、3歳ぐらいのライト

ブルーの髪の毛の白いワンピースを着た少女であった。そして、少女は名乗った。

「私の名はベガ・A・ルーシエ。この子はユニコーンのアルタイル」

「ベガ・A・ルーシエ……」

反復するヴィータ。

「目的はなんだ？」

目的を聞くシグナム。

「それは言えない。言ったら兄上に怒られる。」

「兄？そいつが主犯か？」

頷き、肯定するベガ。

「とにかく、仲間の方に向かうのをお勧めするよ。それじゃあ、私はこれで。」

「な？待ちやがれ！！」

立ち去ろうとする侵入者、ベガを捕まえようとするヴィータ、シグナム。だが、ベガは地面に煙幕を叩きつけ、そのままアルタイルに跨り、海の上をアルタイルで走りながら逃げ去った。

「う、馬が海を。」

「ヴィータ、馬ではなくユニコーンだ。しかし、やはり本気を出していないかったようだな。」

そう、アルタイルはフェイト並みの速さで海の上を駆け抜けていったのだ。

「うっせ、どつちでもいいだろ。とにかく、あのヤローが言っていたことが気になる。急いでなのは達の所まで行くぞ。」

「ああ、そうだな。」

「副隊長」

二人がなのは達のところまで行くかどうかと考え始めたところに、ようやくフォワードの四人が到着した。(遅すぎる)

「おい、お前らいきなりだがこれからすぐになのは達の所に向かうぞ。いいな!!!」

「え?、なんですか。ヴィータ副隊長。」

そう聞くのはスターズ03、スバル・ナカジマであった。

「説明は後だ!!!とにかく早くぞ!!!」

「了解!!!」

ヴィータの迫力に負けたフォワード四人であった。その二十分後、ヴァイスの操縦するヘリでなのは達のもとにヴィータ、シグナム、スバル、スターズ04、ティアナ・ランスター、ライトニング03

エリオ・モンディアル、ライトニング04、キャロル・ル・ルシエが  
向かうのであった。



第二話裏 少女と出勤（後書き）

うーん、やっぱりグダグダだー。文才と感想をください。

### 第三話 魔龍降臨（前書き）

中途半端は嫌なので、感想がこなくてももつづけます。

### 第三話 魔龍降臨

フエイトside

この男の子がこの1年間の事件の犯人？ いったいなぜ？ それに、

「機動六課を存続させるためって、どういう意味？」

「文字どおりの意味さ。俺たちの目的のために存続させる必要があったのさ。だから俺とヘリオスで一暴れしたのさ。」

「ヘリオス？」

「なんだ、忘れたのか？ 目撃情報にあったらう、黒い龍の事がそれがヘリオスさ。」

「それはあなたの召喚獣？」

「少し違うな。そうだな、強敵と書いてトモと呼ぶところかな。」

「龍とやりあつて・・・」

「まあ、それはともか、・・・どうやら来たようだな。」

フリースide

「「「？」

二人は頭に？マークを浮かばせたが、その？はすぐに消えることになる。なぜなら、

「「なのはさーん」「

と叫ぶティアナ、スバルコンビ。

「「フェイトさーん」「

と叫ぶエリオ、キャロコンビ。

「なのはー!!」

と叫ぶヴィータ。

「テストロッサ」

と叫ぶシグナム達六課メンバーがなのは達の前に躍り出たからである。

「「みんな!!」」

とうぜん驚く二人。

「来たか。これで舞台は整った、アルザスの召喚師もいる。十分に暴れられるぞヘリオス。」

「そうか。ついに来たか！アルザスの召喚師よー!!」

「「「「「「!!!!」」」」」」

その突然聞こえてきた声の主に六課メンバーは驚きを隠せなかった。声の主はゴルフボールサイズの黒と赤の模様の球体だった。否、その球体の変形した龍を思わせる形をしたなにかであった。

「ようやくこの時がきた。待っていたぞ！アルザスの召喚師、キャロ・ル・ルシエよ」

「え？私ですか！？」

突然名指しで呼ばれ、戸惑うキャロ。

「そつだ、お前だ。俺の名はヘリオス！貴様が使役するアルザスの真竜、ヴォルテールを今すぐ出せ！！俺はそいつと戦うためにここに来てきたのだからな！！！」

「えー！？戦うって、そんな小さいのにどうやって？」

ヘリオスの発言におもわず突っ込むスバル。他のメンバーも驚きを隠せないようだ。

「ええい、やはりこの姿では迫力に欠ける。スペクトラ！早くしろ！！！」

「そつ焦るなヘリオス。それに、お前に言われずともお前の真の姿をこいつらに見せるつもりさ。」

「ならば、早くやれ！！！」

そつ言い放ち、再びボールの形に戻りスペクトラの手の平に乗る

ヘリオス。二人（一人と一体？）の会話に疑問を浮かべる六課メンバー。だが、その疑問はすぐに解消される。なぜならば、

「真の姿を現せヘリオス！シユート！」

そう叫び、ヘリオスを地面に向かって投げつけるスペクトラ。そして、ヘリオスが地面に着弾、しばらく転がり止まった後、それは現れた。

「ウオオオ————————！！！！！」

「————！！！！————」

凄まじい咆哮をあげ、現れたのは黒い龍、いや、黒い鎧のごとき外皮を纏った赤き龍だった。そう、これこそがこの1年間の事件で目撃され続けた黒き龍、大木のごとく太き手足、尻尾の先は槍のごとくがつている。これこそがヘリオス！

「これこそが、俺の真の姿だ。さあ、早くヴォルテールを出せ！！」

「……わかりました。ヴォルテール！！」

キャロもまた、黒き人型の龍、ヴォルテールを召喚する。

「さて、俺たちの方はもう少し離れたところで戦うとしよう。ここでは巻き添えを喰らうのがオチだ。」

そう言い、飛行魔法で移動を開始するスペクトラ。六課メンバーもこのままでは巻き添えを喰らうだけだと判断し、エリオとキャロ

を残してスペクトラの後を追っていった。

始まる。

今、アルザスの真龍と黒き魔龍による頂上決戦が

第三話 魔龍降臨（後書き）

うーん、キャラ以外が空気だ。誰か文才を。



## 第四話 炎の蹂躪（前書き）

前回、二大怪獣頂上決戦を予感させましたが今回は人間同士の戦いです。

## 第四話 炎の蹂躞

スペクトラside

俺はヘリオスたちから600mほど離れた地点の小高い丘に向かっていた。あそこからならヘリオスたちの戦いを見ながら戦うことも可能だろう。

さて、問題は後ろの六課メンバーたちだ。さすがにあの人数を一度に相手取るのは骨が折れる。となると、あの手を使うか。

「ん？どうやら、色々考えるてるうちについたようだな。」

俺が着地した後、六課メンバーも次々と到着する。さて、まずはあの二人だ。俺はプラウディアに指示し、アレを発動する。

スバルside

私たちがあの男の子の後を追いつ、小高い丘についた時、突然、地面から火柱があがった。合計8本あがったそれは私とティアを除く四人をお互いに絡み合い、ドーム状の結界に姿を変えた。

「なのはさん、フェイトさん、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長  
！！！」

なのはさんたちが何か叫んでいるけど、こっちにはなにも聞こえない。

「無駄だ。その結界は外側からしか破れない。もっとも、それを実行した場合は俺に対して長時間背中を向けるという事になるがな。」

「「！！」」

私とティアは愕然とした。この子の言っていることが本当だとすれば、私たち二人だけでこの子を倒さないと結界を破壊する事は出来ないという事になる。この、未知数の実力の持ち主を相手にだ。

「ちなみに、中は高濃度のAMFで満たされている。外からの声はとどくが、中からの声は念話をふくめてすべて遮断されている。」

「という事は、私たちは未知数の相手に対してなんの情報も無しで挑まなければいけないという事？」

「そういう事だ。」

「ねえ、なんでこんな事をするの？ いったいなにが目的なの？」

「お前たちの実力を見極めるためだ。今後のために。」

「どついう意味？」

「おっと、これ以上は言えないな。この先が聞きたければ、俺を倒す事だな。」

「いいじゃない、スバル、絶対に勝つわよ！！」

「もちろんだよ、ティア！！」

なのはさんたちを助けるためにも絶対に負けない！！

スペクトラside

「では、こちらからいかせてもらっぞ！！プラウディア、ブレードアップ！！」

「ブレードアップ」

俺はプラウディアから炎の刃を発生させる。それを見て二人とも驚いているようだ。

「あなた、炎熱の魔力変換資質を！」

「その通りだ。」

そう、俺は魔力変換資質「炎熱」を持っている。ゆえに、俺の戦いは炎が武器となる。

「さて、おしゃべりはこれくらいにしてそろそろ始めるぞ、炎の蹂躞劇を！！」

「！来るわよ、スバル！！」

「わかってるよ、ティア。」

「くられ、ブラストボム、ファイア！！」

「ブラストボム」

俺は火球を20個形成し、二人に向かって発射する。二人とも小限の動きでかわすが、それだけではこの攻撃はかわせない。なぜ

なら、

## Free side

スペクトラの放ったブラストボムは二人には当たらずに地面に着弾する。普通の魔力弾ならそれで終わりだがブラストボムはその普通には当てはまらない。なぜならば、

「！！！！」

ブラストボムは魔力弾というよりは魔力爆弾というべきだろう。さらに着弾した瞬間だけではなく時間差をつけて爆発させることもできる。

ゆえに、二人とも時間差で襲ってくる爆発に戸惑うも、そこは歴戦の魔導師というべきか、みごとにかわしている。

「ほう、なかなかやるじゃないか！」

「！！」

今度はティアナにたいしてスペクトラがプラウディアで直接斬りかかる。ティアナはそれをクロスミラージュのブレードで受け止める。が、それは致命的なミスであった。そのことを彼女は身をもって知る事になる。

「！！」

スペクトラのブレードは炎で構成されている。ゆえに、ティアナのように受ければ自身のデバイスが徐々に熱せられる事になる。当然、デバイス自体もそれを扱う本人もただでは済まない。

「う、あ、熱い。」

「ティア！」

「おっと、そうはさせないぞ。」

熱に苦しむティアナを助けようとスペクトラに攻撃を仕掛けようとするスバルに対して、スペクトラは自身のバリアジャケットの一部である四対八枚の赤い羽をむける。

「くられ、炎羽乱舞！！！」

そう叫んだ瞬間、スペクトラの羽が炎に包まれる。そしてそれはいくつもの炎の羽根に変化し、スバルへと襲いかかる。

「！！」

あわててプロテクションで防ぐが、それはかえって逆効果だった。なにせ、その羽根はプラスチックボム同様、爆発するのだ。しかも爆発の時発生した熱はしばらくその場に留まる。

ゆえに、スバルは爆発と灼熱の地獄にさらされることになる。

「く、うつつうつつ、「パリーン」きゃあああー！！！」

当然ながら、その地獄にいつまでも耐えきれぬはずもなく、スバルのプロテクションは砕け散り、羽根が直撃する。羽根は一瞬でスバルの意識を刈り取り、バリアジャケットを穴だらけにした。

「スバル！！！」

「ちなみに」

目の前でやられた相棒に声をかけるティアナにたいし、羽を向けるスペクトラ。

「この技は全方位技だ。お前もくらうがいい。炎羽乱舞！」

「な！きやああー！ー！ー！」

ティアナにたいして自身の技の解説をした後、ティアナに向けて発射する。とつさに後ろにジャンプするが、時すでに遅し。羽根がすべて直撃する。

ティアナは自身の相棒と同じ様に意識を刈り取られ、地面に横たわるはめになったのであった。

「ふむ、まだまだだな。」

スペクトラは二人の実力を評価し、二人を結界にたいして放り投げた。二人ははじかれることなく結界にあいた穴に吸い込まれるのだった。

「次は、だれにするかな。」

## 第四話 炎の蹂躪（後書き）

主人公がチート化してきたかも。



## 第五話 炎の舞（前書き）

今回は主人公VSヴェイターです。

## 第五話 炎の舞

ヴィータside

チクシヨウ！あのヤロー、よくもティアナとスバルを！二人ともあちこち火傷を負っていやがる。と、そこまで考えたところであたしはなにかに引っ張られるのを感じた。よく見たら炎が手になってあたしを掴んで居やがる。そしてあたしは結界に開けられた穴から外に放り投げられた。

スペクトラside

俺は今度は鉄槌の騎士ヴィータと戦う事にした。もっとも俺はパワーマッチが苦手だ。だからこそ、面倒な相手を先に片づけることにした。それに、頭に血が上っているのなら隙はいくらでもできるだろう。

「いつてー。なにしゃがるんだこの赤ヤロー！！」

「・・・少なくともお前にだけは赤ヤローと言われたくないな。」

「うつせー！そんなことよりもお前ティアナとスバルを！！」

「心配するな。一応非殺傷設定で攻撃しておいた。命に別状はないはずだ。」

そう、俺はなにも殺すために来たのでは無い。あくまで実力をはかるためだ。命を奪ってしまっっては元も子もない。

「・・・お前、なにがしたいんだ？」

「さっき二人にも言ったが、それを知りたければ俺を倒す事だな。」

「わかったよ。ようはお前をぶっ潰しやーいいんだな。その方が分かりやすいぜ！」

おい、待て

「なぜそういつ結論に至る。」

「うっせー！お前もさっさと構えろ！」

どうやら既に臨戦態勢に入っているようだ。

「いいだろう、だがその前にこいつをつけさせてもらっぞ。」

俺はガントレットを取り出し、左手に装着する。

「なんだ、それ？」

「ガントレット。これがなんなのかは、すぐにわかるさ。ガントレット、チャージオン！」

俺はガントレットからブレードを展開する。

「お前、二刀流か！」

「その通りだ。さあ、準備は整った！始めるとしようか。鉄槌の騎士ヴィータよ！！！」

「望むところだ!!」

Free side

最初に仕掛けたのはヴィータだった。グラーファイゼンを横薙ぎに振るう。それをスペクトラはバックステップでかわし、ブラストボムを放つ。

「ちっ!」

先のティアナとスバルの戦いを見てその技を知っていたヴィータは飛行魔法で上空に逃げてかわす。が、それを予想できないスペクトラではない。こちらも飛行魔法で接近し、両手のブレードで斬りかかる。

「!プロテクション、バリアパージ!!」

「ほう、やるじゃないか。」

スペクトラの斬撃はただ守っても熱でやられてしまう事を知っているヴィータはプロテクションで受けた後、熱が伝わってくる前にプロテクションそのものを爆発させスペクトラと距離をとる。その行動を評価するスペクトラ。

「ならば、これはどうだ。炎羽乱舞!!」

「うわ!いくらなんでも多すぎだろ!」

スペクトラの攻撃に悪態をつきながらも飛行魔法を解除し重力に

身を任せ、地面に当たる前に再び飛行魔法を発動する。

(やっぱりあの数を操作する事はできねーようだな。射線上から離れれば怖くはない！)

(どつやらの技の弱点に気づいたようだな。さて、どつ攻めてくる。)

スペクトラの技の弱点に気付いたヴィータはカートリッジをロードする。

「ラケーテンハンマー!!」

「そうくるか、ならば!!」

ラケーテンハンマーで回転しながら迫ってくるヴィータにたいして、スペクトラは地面に着地しデバイスのブレードを解除し、仁王立ちになる。

(なんのつもりだ?いくらなんでもこいつをまともに受けたらただじゃ済まないぞ。)

ヴィータは内心で思案する。相手の狙いはなんなのかを。だが、考えても詮無い事。そのまま攻撃を続ける。そして、

「くらいやがれ!!」

「いいや、くらつのはお前だ!!」

スペクトラは倒れた。ただし、ヴィータの攻撃ではない。自分が

ら後ろ向きに倒れた。そしてそのままブレードを展開する。

「な！」

「くらえ！炎のワルツ！」

飛行魔法で強引に体を前に向け、両のブレードでワルツを踊るかのごとくヴィータに斬りかかる。かわせるはずもなく攻撃をすべてその身に受け、吹き飛ばされるヴィータ。

「ぐっは」

「どうだ、俺の炎のワルツの味は。ちなみに」

地面に叩きつけられたヴィータにたいして羽を広げながら接近するスペクトラ。

「炎羽乱舞は二種類ある。一方向に放つ壱式と、もうひとつ、全方位に向けて放つ弐式がな。」

「！！」

体を起こし、少しでも離れようとするヴィータ。だが、時すでに遅し。情け容赦無い攻撃が降りかかる。

「くらえ、弐式炎羽乱舞！」

「ぐああああ————！！！」

気絶し吹き飛ばされるヴィータ。スペクトラが放り投げるまでも

なく、結界の方に飛ばされ、穴から結界に再び入る事となった。

「やはり、頭に血が上っている相手の攻撃は単調だな。こんな手にあっさりと引っ掛かってくれるとはな。」

## 第五話 炎の舞（後書き）

やっぱりバトルシーンは駄目だー。原作ファンの方、すいません。  
あと、しつこいようですが文才をください。



## 第六話 (前書き)

お気に入り登録してくれた人が・・・ありがとうございます!!

## 第六話

### Free side

スペクトラがヴィータを打ち取ったちょうどその時、なのは達を閉じ込めていた結界が桃色の砲撃により内部から破壊された。

「まさか、あの結界を内側から破る者がいたとは！」

さすがに驚きを隠せないスペクトラ。そして、破壊された結界の中から、・・・魔王がご降臨なされていた。

「ねえ、さっきから私たちの実力を測るって言っているけど、なんでみんなをこんなに傷つけるの？」

(・・・やばいな、地雷を踏んでしまったか？しかし、Sランクを三人か。さすがにまずいな。)

表面上は冷静にふるまっているが、内心ではなのはの魔王っぷりに冷や汗をかいているスペクトラであった。そして、魔王はという

「レイジングハート、エクシードドライブ！」

全力全壊（誤字にあらず）であった。

「どうやら俺も全力を出さねばいけないようだな。プラウディア、フルドライブ、モードトライデント！」

スペクトラもまた、ここで捕まるわけにはいかない。そのために自身の全力をもって挑む事を決めた。

ブラウディアが三つ又の槍にその姿を変える。

両者ともににらみ合い臨戦態勢に入る。が、四人ともなかなか動かない。わかつているのだ。うかつに動けばやられるのを。

そんな膠着状態を破ったのはフェイトであった。持ち前のスピードでスペクトラにザンバーフォームで斬りかかる。

「！、炎羽硬！」

とつさに羽を炎で包み込みそれで身を守るスペクトラ。そして衝突。どうやらフェイトの斬撃のほうが上がったようだ。弾き飛ばされるスペクトラ。だがすぐに空中で体制を立て直す。そこへさかさずシグナムが斬りかかる。

「紫電一閃！」

「く、ヴォルカニックシールド！」

それを炎を纏った槍の先で受け止める。数秒の拮抗の後、唐突にシグナムは退く。

「！しまった。」

そう、二人が時間を稼いでる間になのはのチャージが完了したのだ。当然、放つのは

「全力全開！スターライトブレイカー！！ブレイカーシュート！！」

迫りくるスターライトブレイカー。だが、

「ネオヴァリウト!!」

羽で自らを包み込み全身から赤い魔力を放出するスペクトラには、きかなかった。

「「「!!!」」」

自身の最強の魔法であるスターライトブレイカーを防がれ、啞然とするのは、シグナムとフェイトもまた、目の前で起きた事が信じられないというように目を丸くする。

「残念だが、俺に砲撃は通じない! くらえ、バーストコア!」

羽を広げたスペクトラの胸のあたりには直径30cmほどの球体が形成されていた。そしてそれをプラウディアでシグナムとフェイトにたいして弾き飛ばす。そして、その球体は三人の中間地点で爆ぜた。

「ぐあ!」

「!シグナム!」

フェイトほどのスピードを持ち合わせていないシグナムではその攻撃をかわす事はできなかった。爆発により吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

「よくもシグナムさんを!」

「なのは、こうなったらもう弔い合戦だよ! (死んでない)」

「そうだね、フェイトちゃん！」

「おいおい、誰も死んで「ドォーン!!」なんだ！」

スペクトラが弔い合戦と言うが誰も死んでない事を指摘し終わる前に突如として爆音が響き渡る。

「あの方向はヘリオスたちか！ち、やりすぎだぞヘリオス！」

爆音の原因がヘリオスであることを瞬時に察知したスペクトラはすぐに向かう。

「！待って！」

「なのは、ここは私に任せて早く行って！」

「わかった。フェイトちゃん、後は任せたよ！」

そついい、スペクトラの後を追うなのは。はたして、キャラ口達の方で一体何が起きたのか。

## 第六話 (後書き)

魔王を出してみました。リリなのといたらやっぱり「ねでじょう」！

第七話 龍轟く(前書き)

ついに二大怪獣頂上決戦(笑)です。

## 第七話 龍轟く

スペクトラとなのは達が戦闘を開始したのとほぼ同時刻、キャロ達の方でも始まった。いや、始まったというより、すでに始まっていた、と言うのが正しいか？

とにかく、二体の龍の決戦が起きたというのは揺るぎようのない事実だ。そして、その場で起きた事、

それは、人の立ち入るすきなどなかった。否、今、この場所に、人がいて良いのだろうか？とにかく、その戦いはそう考えざるを得ないほどだった。

二体の黒き龍がぶつかるたびに大地が削れた。

二体の拳がぶつかるたびに大気は震えた。

二体の頭がぶつかっても同じ事だった。

そして、両者共にこのままではらちが明かないと判断したのか、お互いが火を噴いた。いや、それはもはや火とは呼べなかった。それのぶつかる様はこの世の地獄を連想させた。

そして、両者の間で発生した火球は唐突に爆ぜた。まるでビッグバンかと言わせるほどの爆発だった。その爆発に巻き込まれれば吹き飛ばされるのは必然である。だが、世の中には必ず例外と言うものが存在する。この時はキャロ、エリオ、フリードがその例外に当てはまった。なぜならば、

「「え？」」



彼らが吹き飛ばされるのを赤いサソリを思わせる巨大なメカ（？）が防いでいた。

「間に合ったか。よくやったぞ、フェンサー」

そう、それはスペクトラが爆発の直前にフェンサーを投げ、それがキャロ達の前で本来の姿に戻り爆風からキャロ達を守ったのだ。

「！お前は！」

「おっと、今は俺の相手をしている場合ではないはずだぞ。それから、アレを見る。」

「「？・・・！！」」

二人がスペクトラに促され、見た先にあっただのは巨大なクレータ―だった。当然、先の爆発によりできたものだ。その大きさが爆発の威力を物語っている。

「まったく、ヘリオスのやつ、やりすぎだ。つくづく戦闘狂だな。」

ちなみに、今の爆発でも二体は平気のようだ。そこはさすがと言  
うべきか？

「ヘリオス。」

「なんだ？俺の戦いの邪魔をするなど言っただはす。さがれ！」

「そう言うな。それに、代わりにいい情報が入った。やつらを30  
ほど発見したとベガから連絡が入った。それで我慢しろ。」

「ちっ、わかった、それで我慢してやる。さっさと行くぞ！」

「言われずとも。」

そうしてヘリオスは玉に戻り、スペクトラの手に収まった。

「！逃げるのか！」

「違うな。別の用事ができてな、そっちを優先しなければいけないのさ。それに、こっちはもう目的は達した以上いる理由もないのでな。」

「じゃあ、その目的を教えてくださいら。」

チャキッとスペクトラの背にレイジングハートを追いついたなのはがつきつける。

「・・・いずれわかるさ。そう遠くないうちに。では、さらばだ！」

「」「」「！」「」「」

フェンサーがなのは達に砲撃を放ち、それを避けている間にフェンサーを回収し、スペクトラは転移魔法で逃げた。

第七話 龍轟く(後書き)

うーん、展開が急すぎる。

第八話表 闇に潜むもの(前書き)

びみょーにネタがあります。(わからない人多いと思います。)

## 第八話表 闇に潜むもの

スペクトラは転移魔法で向かった先はある無人世界だった。

「兄上。」

「ベガか、状況は？」

「ここから西におよそ30km先の岩山に中級のクライアントが60ほど。」

「クライアントか。となると指揮官がいるはずだ。」

「なんでもいい、暴れさせる！」

「そう急くな。管理局に見つからないようにしなければならぬ。結界が発動するまで待て。」

「ええい、ベガ！あとどれくらいだ。」

「あと五分ほど。」

「なら、ゆっくり行くとしよう。」

さて、わずか数分の会話だが突っ込みどころが満載であるがそれはいずれわかる事になる。(by作者)

「時間だ。もう暴れて良いぞ、ヘリオス、シュート！」

「やつとか。さあ、この俺を少しは楽しませろよ。魔獣ども！」

「やれやれ、ベガ、手を出すな。」

「わかってるよ兄上。」

どうやら二人は傍観を決め込むようだ。そして、ヘリオスはとうとう自らの炎で岩山を吹き飛ばしていた。ちなみにこれはなにもヘリオスが奴当たりで吹き飛ばしたわけではない。

なぜならば、その岩山に潜む存在がいたのだ。それは、

「ほう、中級のラゴウか。面白い相手だ。」

およそ60ほどのゴリラに巨大な爪を付けたような黒い生物とそれを従えていると思われる双頭の頭と羽を持つ赤いオオカミのごとき生物。

そう、これこそがスペクトラ達にとっての真の敵、魔獣と呼ばれる存在だ。

「ちっ、この程度の相手しかないのか。つまらん。せいぜい潔く死ね。」

その直後に放たれるは赤き火球。それによりゴリラもどきは全滅。残るオオカミもどきは楽々とかわすとヘリオスに迫るが

「ふん、貴様などこの俺の相手では無い！」

ヘリオスの鉄槌により地に沈んだ。

「やはりこの程度か。スペクトラ！ホログラムの用意をしておけ！」

でなければ俺の気がすまん！」

「わかっている。わかったから帰るぞ、ヘリオス。ベガ、悪いが事後処理を頼む。」

「いつもの事だからいいよ。スペシャルパフェver3ね。」

「了解、用意しておくでは、先に行く。」

スペクトラとヘリオスは転移し、ベガは黙々と戦闘の痕跡を消していくのだった。

## 第八話表 闇に潜むもの(後書き)

ある程度ストーリーに区切りがついた所でキャラ設定などを投稿します。



第八話裏 疑問（前書き）

今回は機動六課sideです。

## 第八話裏 疑問

スペクトラとの戦闘からおよそ4時間後、機動六課では会議が行われていた。議題は無論、スペクトラ達についてだ。

「ほんま、何者だったんやろなあの子達。」

そうぼやくのは機動六課総隊長、八神はやて（別名チビ狸）であった。

「うーん、私たちを試すためって言ってたけど、それだってなんのためなのかな？」

「わからん。だが、奴の太刀筋には邪念が感じられなかった。邪な目的というわけではなさそうだ。」

「それにしても、あの龍とサソリ（？）はなんだったのかな？」

そう、それこそが今回の最大の議題である。スペクトラの方はまだいい。こちらは魔力変換資質を持つ高ランクの魔導師と判断できる。

だが、問題はヘリオスとフェンサーの方だ。片や、ヴォルテール並の力を持つ龍、片や、機械のサソリ、どちらにしても謎が多すぎるのだ。現在は分析の結果待ちである。

「お待たせしました。ようやく分析が終了しました八神部隊長。」

「お、やっと終わったか、シャーリー。ほな、早速報告をきこかー。」

「はい、それが、よく分からないというのが現状です。」

「やはりそうか。」

「はい、わかっている事だけ言いますと、」

シャーリーの報告によると現在わかっている事は、

ヘリオスの玉の形はフリードが普段小さいのと同じようなものである事。

フェンサーは機械のはずだが生体反応が存在する事。

フェンサーの体は未知の金属で構成されている事。

以上の三つである。

「結局、肝心な事はわからずじまいやと。」

「すみません。」

「いや、シャーリーが謝る事はないって。」

「にしても、本当に何者なんだろうね。」

「わからんけどこれからやるべき事は決まったで。」

「決まったとは？」

「本日今、この時を持って、機動六課は彼らを一連の事件の犯人とし、逮捕に全力をあげる事や。なお、捜査時は全員デバイスを携帯する事、および発見しても応援が来るまで監視する事、以上や。」

「「「「「了解！」「」「」「」」

本局から正式に辞令が下ったのはこの3時間後であった。

第八話裏 疑問（後書き）

うーん、はやてを出したのはいいけど、関西弁は難しい。

## 第九話 戦いの序章（前書き）

いよいよ物語が本格的に動き始めます。

## 第九話 戦いの序章

スペクトラとベガはアジトのある、いまだ管理局が発見していない世界にてくつろいでいた。

「スペクトラ、管理局が動き出した様だがこれからどうするのだ？」

「そうだな、当分は魔獣共が出てきたら管理局に見つかる前に叩く。その繰り返しになるだろうな。ヘリオス。」

「となると、当分俺の出番は無しか。ええい、忌々しい！」

「そう言うな、まだ管理局と協力するには早すぎくアラート！アラート！>何事だ！」

スペクトラとヘリオスが今後について話していたときにアジト全体にアラートが響き渡った。

「兄上！ミッドチルダにて魔獣たちの反応！さらに最上級の魔獣の反応も確認！」

「なんだと！ええい、仕方がない予定変更だ！ミッドにいる連中を片づけたら、管理局に接触、協力体制をとるぞ！ベガ！データのコピーを作成したらお前もすぐに来い！」

「了解しました、兄上！お気をつけて。」

「ああ、行くぞヘリオス！」

「言われずとも行くに決まっている!」

会話をしながら準備を済まし、ミッドに向かうのだった。

一方、ミッドチルダでは突如現れた異形の存在と陸士部隊と機動六課による戦闘が行われていた。戦況は異形、つまり魔獣たち（中級のクライアントが100とラゴウが20）が優位に立っていた。そのわけは、

「駄目、やっぱり魔法がきかない!どうなっているの!」

「AMFの反応無し!?じゃあ、なんで魔法が聞かないの!?!」

そう、なぜか魔獣たちには魔法がきかないのだ。例外を除いて。

「なんでシグナム達の攻撃は有効なんや?」

どういうわけか、シグナム、ヴィータ、スバル、エリオの攻撃だけはきいているのだ。そのわけは、

「!そうか、シグナム達は武器で攻撃しているんだよ!だからきいているんだよ!」

そう、シグナム達のデバイスはその形状自体が既に武器のそれである。ゆえに攻撃が有効なのである。

「という事は、私たちはここで指をくわえながら見ていろって事な  
「その通りだ。」!君は!」



なのは達の前にスペクトラが舞い降りた。(シグナム達は戦いに集中しているため気づいていない。)

「今のお前たちでは足手まといになるだけだ。さっさと帰る事がこの場での正しい判断だ。」

「な、なんですって!」

「テ、ティアさん、お、落ち着いて。」

「その口ぶりやと、あんさんはあいつらを倒せるように聞こえるな  
」。

「その通りだ。それから、ヘリオスをこんなところで暴れさせるわけにはいかない。ならばここは奴らとの戦闘経験が一番多い俺が戦うのが最善だ。」

「っ、仕方がないわ。シグナム達を残して撤収する!」

「「はやて!(ちゃん)」「」

「察してくれや、二人とも。」

「「.....」」

「そう言う事だ。早く行け。」

「わかった、けど!」

「?」

「みんなを傷つけたらただじゃおかないよ!」

「言われるまでもない。」

スペクトラはプラウディアをフルドライブにし、魔獣たちへと斬りかかって行った。

2時間後

「どうにか片付いたか。」

そう呟くスペクトラの周りには魔獣たちだった物体が散乱していた。

「!テメーは!」

どうやら戦いに集中していてスペクトラの存在にヴィータは今気づいたようだ。

「なぜここにいる。答えな」この魔獣共を倒しに来たのさ。」「・・・魔獣?こいつらの事か?」

「ほかになにがある。」

「テメー、いったい何者なんだ。」

「それも込みでこの後お前たちの部隊まで行く予定だ。質問はその時にしてくれ。」

「なんだと！信用できるねー！」

「落ちて着けヴィータ。こいつは嘘はつかん。剣を交えたからわかる。こいつに邪気はない。」

「っ、わかったよその替わり、かならず来い！」

「わかっているぞ。」

さて、ヴィータ達が引き揚げた後、スペクトラは付近を調べ始めた。

「……どうやら最上級は逃げたようだ。ヘリオス。」

「となると、戦力の把握が目的か。ふん、臆病者め。」

「そうかもな、だが、文献どおりだ。」

その後、ベガと合流し、六課隊舎に向かうのだった。

第九話 戦いの序章（後書き）

カオスだー！いくらなんでもカオスすぎる！だれか、文才を！

第十話 眞実（前書き）

遅くなりすいません。

## 第十話 真実

Free side

機動六課会議室、そこでは現在、重苦しい空気が漂っていた。何故か？簡単だスペクトラ、ベガ、ヘリオスという異分子がいるのだから。

「おい、このまま互いにだんまりを決め込んで話が進まない。そろそろ腹を割って話さないか？」

場の沈黙を破ったのはスペクトラだった。彼にしてみればこのまま話が進まないようでは困るのだ。

「それもそうやな。じゃあ、こっちから先に質問させてもらってもええか？」

「ああ、かまわないが？」

「なら、単刀直入に聞くで。あんたらは何者で、あの生物達はなんなんや？」

「ふむ、俺たちの事はあとでもいいか？」

「質問を質問で返さんといてや。まあ、別にええけどな。」

「そうか。ならば先に言っておくぞ。魔獣共に関する話はかなり長い。途中での質問は無しだ。それでいいか？」

「わかった。」

「では話すぞ。まず、魔獣たちのルーツについてだ。やつらの祖先は人類の祖先とほぼ同時期に誕生した。そして、人類同様に進化の道を歩んでいき、今の魔獣共が誕生した。さらに、今の種の中には人語を話す魔獣、最上級が八体存在する。こいつらが人類との生存競争のきっかけとなった。なぜだかわかるか？て、話を聞け！」

スペクトラの発言に六課メンバーは戸惑いを覚えた。当然である。魔獣が人類と同等の歴史を持つのだから。

「おい、少し冷静になれ。」

「冷静になれるわけがあるかー！！」

「そつだよ！そんな話を聞かされたら無理だつて！」

「なのはの言う通りだよ！」

「よし、ベガ、帰るぞ。」

「はい、兄上。」

「て、帰らんといてーな。」

「なら、話をちゃんと聞け。いいな？」

スペクトラの発言に全員頷く。

「よし、話を戻すぞ。何故、生存競争が始まったかわかるか？」

「ハイ！食べ物をめぐって！」

「バカスバル！そんな事あるわけないでしょう！」

「ひ、ひたいよティア！」

スバルのバカな発言をほっぺをつねりお仕置きするティアナ。

「えーと、もしかして、自分たちが上位種だと思ったから？」

「正解だ。フェイト執務官。そうだその通りだ。そして、それが本格化したのは今から2000年前の事だ。そして、魔獣共は先人達により封印された。」

「じゃあ、なんで魔獣達が現れたの？それに封印って？」

「現れたのは封印が解けたからだ。十一年前にな。封印は当時の人間の力では滅ぼすことはできなかったからだ。それだけ強大な力を持っているという事だ。」

「ちよつとまで、昼間のお前はさほど苦労せず倒していたようだが？」

「あいつらは中級の雑魚だ。それにさほど賢くはない。だから簡単に倒せる。」

「あれで雑魚って・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」



スペクトラの発言に全員がショックを隠せない。当然だ。自分たちがスペクトラの言うところの雑魚に苦戦していたのだから。それでショックをうけるなという方が無理な話だ。

「そう気を落とすな。お前たちでも戦い方さえ覚えれば奴らなど圧倒できる。」

「……………え?」「……………」

「それから、奴らの体はAMFのようなものを常時纏っているようなものだ。だから射撃が通じなかったのさ。」

「そ、そうなんだ。」

「だが、安心しろ。奴らのAMFもどきを無力化するためのプログラムは既にできている。」

懐からディスクを取り出すスペクトラ。

「こ、これをみんなのデバイスにインストールすれば!」

「うん、魔獣達と互角に戦える!」

「おい、なにか勘違いをしてないか?」

「……………?」「……………」

「いいか、先人達が魔獣共を滅ぼせなかったのはなににも先人達が近接戦を余儀なくされたからではない。」

「どづいつ事や？」

「簡単だ。純粹に魔獣共特に最上級八体が強すぎるからだ。俺はそれを身を持って知ったからよくわかる。」

「身を持って？」

「これを見るがいい。」

そう言い、おもむろにコートを脱ぐスペクトラ。そして、露わになったスペクトラの体に全員が驚愕する。

「「「「「「!!!」「」「」「」

露わになったスペクトラの体。その身には大きな傷が刻まれていた。具体的には左腕。肘から肩にかけて火傷のような傷がある。

「かつて、オーガと名乗る最上級と戦った、いや、正確には俺が一撃をもらってそれで終わったと言うべきか。」

「よく生きていたな。」

「ああ、自分でもそう思うよ。先人達の技術が無ければ俺は死んでいただろうな。」

「先人達の技術？」

「ああ、だがそれについては後だ。それから、今の俺なら奴らにも勝てるはず。」

「勝つ方法があるのか！」

「ああ、だがそれについては明日だ。」

「明日？」

「今日はもう遅いうえに全員消耗しているからな。」

「わかったで。じゃあ、明日の朝八時に訓練場に集合や！」

「「「「「了解！」」」」」

「わかった。」

「ほな、解散。あ、あと、二人は泊っていきーや！」

「では、そうするか。」

「兄上。」

「どうした？べガ。」

「私はアレを持ってきます。」

「！・・・そうか、くれぐれも用心しろ。」

「わかってます。」

「そういい、どこかに転移するべガ。」

「?アレってなんや?」

「明日になればわかるぞ。」

「そか、ならおやすみ〜。」

第十話 眞実（後書き）

うーん、グダグダだな。

第十一話 炎の魔鳥（前書き）

チート炸裂です。

## 第十一話 炎の魔鳥

翌朝、機動六課訓練場にベガを除く全員が集合していた。

「おい、ベガはどうした？」

「ああ、ある物を取りに行った。この模擬戦が終わるころには来るはずだ。」

「そか、なら始めるか。」

「そうしよう。では、見せてやろう。奴らに対抗するために手に入れた力を。来い！テンペスト！」

スペクトラの背後に魔法陣が浮かび上がる。そしてそこから現れたのは炎の羽を持つ赤き鳥であった。

「」「」「」「！！」「」「」「」

さすがに驚きを隠せない六課メンバー。

「フェ、フェニックス！？」

「そんなわけないだろう。」

テンペストの姿をフェニックスと思い、おもわず口から出てしまったはやてに突っ込むスペクトラ。

「そいつが対抗手段なのか？」

「おい！まさかそいつに任せるのか！」

「何を言う。テンペストは俺の大事な仲間だ。俺が仲間一人を危険にさらすような真似をすることも思っているのか？」

「う、すまん、不謹慎だったな。」

「わ、わりー。」

シグナムとヴィータの発言に殺気をぶつけるスペクトラ。彼にとって仲間とは家族に匹敵する存在であるこれは無理からぬ事である。

「分かってくればそれでいい。では、ぼちぼち始めるか。プラウディア！」

「そやな、なら、シャベルトクロイツ！」

「レイジングハート！」

「バルディツシュ！」

「レヴァンティン！」

「アイゼン！」

「マツハキャリバー！」

「クロスミラージュ！」



「ストライダー！」

「ケリユケイオン！」

「……………セットアップ！」「……………」

各々が自らのデバイスを機動させ、バリアジャケットをその身に纏う。

「ほな、始めるぞ。」

「おいおい、そう焦るな。こっちはまだ準備ができていないのでな。」

「

「？…どういう事だ。」

「こつという事だ。ガントレット、チャージオン！」

「あ！そいつのことか。」

「そうだ。さて、ガントレット、スキャンモード。」

ガントレットのパネルをいじり、モードを変更する。するとガントレットのパネルがいくつかの数字を表示する。

「？…なんだ、その数字？」

「すぐにわかるさ。では、今度こそ始めるぞ。テンペスト、行くぞ

！」

「キュアアアアー!!」

スペクトラの呼びかけに咆哮で応えるテンペスト。そして、

「さあ、限界を超えるぞ。融合武装!」

「融合武装?」

「なんのことや?」

聞きなれない言葉に首をかしげる一同。だが、その疑問はすぐに晴れる。なぜなら、

「さあ、共に戦うぞ。テンペスト!」

「キュアアアアー!!」

咆哮と共にスペクトラをその羽で抱きしめるような仕草をすると、途端、閃光がその場を蹂躪した。そして、光が収まり一同は信じられないものを目にする事になる。

それは、テンペストの炎の羽とその頭を模した剣をその手に持つスペクトラであった。

「「「「「「!!!!」」」」」」

「これが、融合武装だ。特殊なユニゾンと考えてくれ。」

「すごい。」

「こんな力があるのか。」

「ん？なんか数字が減ってるぞ。」

「あ、そういえば。」

何故かガントレットのパネル内の数字がゆっくりと減って行く。

「ああ、これは俺がこの姿でいられる残り時間だ。そもそもガントレットはそれを知らせるために開発した。」

「え！てことは、あと十五分でこと？」

「その通りだ。だから手短に済ませるぞ。」

「そういう事なら、みんな、一気にいくで！」

「「「「「「了解！」「」「」「」」」」」」

各々がそれぞれのデバイスを構え、スペクトラに襲いかかるが本人は涼しい顔をして剣を上段に構える。そして膨大な量の炎と共に振り下ろす。

「燃え尽きろ！煉獄の裁き！」

「え！」

「そんなのってあり！？」

「反則やで！」

「ズリーぞ！」

とまあ、各々最後の悪あがきとばかりになにかを口走ったのち、炎に飲み込まれた。炎が消えた後には、気絶こそしていないが、戦闘は続行不可能な面々がいた。

「ふう、融合解除。ぐ、やはり短時間でもこれか。」

融合を解除した途端に膝をつくスペクトラ。

「だ、大丈夫？」

「ああ、問題はない。そこまで長くやっていただけではないからな。歩く事はできる。」

「そか、ならさっさと隊舎に戻ろうか。」

「「「「「りよ、了解。「「「「「」

負けた側も勝った側も息も絶え絶えなあまり見られない光景であった。

## 第十一話 炎の魔鳥（後書き）

はい、オリ設定登場の回でした。

## 第十二話 血の記憶（前書き）

物騒な代物が出ます。

## 第十二話 血の記憶

あの後、ベガが合流し休憩の後、再び会議が開かれた。

「さて、まずはあの力の事について聞かせてもらおう。」

「言われずとも話すつもりさ。だがその説明の前にある物を見てもらわなければならない。」

「ある物？」

「そうだ、ベガ、例のものを。」

「て、なんやそのあからさまに危険やと主張しているケースは。」

ベガが運んできた黒いテープのようなものでぐるぐる巻きにされたアタツシケースであった。

「ああ、危険だ。なにせロストロギア級の代物が入ってるからな。」

「くくくくくく!!!」「くくくくくく」

スペクトラの言葉に驚愕を隠せない六課メンバー。当然である。本来嚴重に管理されるべきロストロギアが目の前にあるのである。

「な、なんでそんなのが!？」

「開けるぞ。」

「人の話を聞いてよ！」

フェイトを無視し、いつの間にか黒い手袋を付けテープを外しにかかるスペクトラ。そして露わになったケース。

「ベガ、ハーフキーを。」

「はいどうぞ。」

二人が懐からそれぞれ半分になっている鍵を取り出す。

「開けるぞ。はなれている。」

「え？なんで？」

「飲まれるぞ。」

言葉と共にケースを開けるスペクトラ。そしてその瞬間、キヤロとエリオが倒れた。

「キヤロ！エリオ！」

あわてて二人に駆け寄るフェイト。

「安心しろ気絶してるだけだ。医務室に運んで置けベガ。」

「はい、フェイトさん私が連れていきますので。」

「う、うん、わかった。」



「よし、全員これを見る。」

「「「「「「!!!」」」」」」

スペクトラが見せたのはガラスケースに入れられた赤いカードであった。それになぜか恐怖を覚える一同。

「な、なんやそれ？」

「この私が恐怖するだと？」

「なんなんだよそれは!」

「怖い。」

「これはブラッドメモリー。古の戦士達が死んだ仲間や犠牲者の事を忘れないために作ったカード。そしてこいつにはある恐ろしい力が秘められている。」

「恐ろしい力？」

「このカードが黒く見える者はいるか？」

「え？赤にしか見えないよ？」

「え？うちには黒く見えるで？」

「私もです。」

「ああ、私もだ。」

「み、見えます！黒く！」

「なんでなのはさんには赤くみえるんですか？」

「私も黒く見える。」

「ふむ、六人か。」

「な、なんで私だけなの？」

一人orzなのはであった。

「こいつが黒く見えるのは、親しきものの死を経験した事がある者だけだ。」

「「「「「「！！！！」」」」」」

スペクトラの言葉に驚く六人。だがその六人にはその条件が当てはまる。はやて、シグナム、ヴィータはリインフォースの死。フェイトは母、プレシアの死。スバルは母、クイントの死。ティアナは兄、ティータの死をそれぞれ経験している。

「そして、このカードが黒く見える事が試練を受けるための絶対条件だ。」

「試練？」

「そうだ。そして試練を乗り越えた者だけが、あの力を手に入れる。」

「それが融合武装なんやな。」

「その通りだ。」

一同、言葉も出ない。いきなりそんな重い話を聞かされれば当然であるが。

「ちなみに試練をするためには俺達のアジトでなければならぬ。」

「え？どうして？」

「試練とは、精神世界でさまざまな苦しみを経験する事だ。その間、体の方は出血等のさまざまな異常が出る。そして、それに対応できる設備は俺達の所しかない。」

「そうなんだ。じゃあ、そのアジトはどこに？」

「管理局がまだ発見してないある世界だ。名をアルクトスという。」

「でも、どうやってそこまで？そんな急に次元航空艦は使えないで。」

はやての言うとおり、次元航空香を借りるには面相な手続きをいくつもしなければならぬため、すぐに借りるのは無理である。

「俺達の船がある。そこに機動六課そのものを移せばいい。」

「え？自分達があるの？」

「ああ、それにでかいし、部屋は大量にある。問題無い。」

「でも、上層部が何と言うか。」

「それも問題ない。」

「八神部隊長！」

突然会議室に飛び込んできたシャーリー。なにやらあわてているようだ。

「どないしたんや、そんなにあわてて。」

「だって、急に上層部から機動六課の機能を彼らの船に移せと指令が！」

「な、なんやってーーーーー!!!!!!」

「そんなバカな！」

「お前なにをしたんだ！」

「なに、上層部の不正の証拠を渡すかわりに認めさせたただだ。」

「くくくくくくええええーーーーー!!!!!!」

「さ、分かっただら作業にかかれ。俺は船の方の準備をしてくる。」

そついい、転移するのであった。

## 第十二話 血の記憶（後書き）

グダグダ率100%だー！だれか、文才を！

## 第十三話 引っ越し

機動六課の機能をスペクトラ達の船に移すための作業が現在行われている。その様子を少し公開すると・・・

「うお！荷物が崩れた！誰か来てくれー！」

「おい、誰かカートを持ってこい！」

「キヤー！ゴキブリ！」

「「「キヤー！」「「「

「誰だ！こんな所に書類を隠していたのは！」

とまあ、上を下への大騒ぎであった。突然の事であるため、しかたがないが。

三時間後

「ど、どうにか終わったなー。」

「もうヤダ。二度とやりたくない。」

「まったくだよ。」

「そっいえば言いだしっぺはどこだ？」

「あら？そういえばおらんー。」

「まさかさぼり！？」

「おい、人のいないところで好き放題言ってくれるな。」

「「「「「「！？」」「」「」「」

一同があれこれ言っていると、突如として海からスペクトラの声が聞こえてきた。

「どこや？どこにいるんや？」

「ここだ。全員海から離れる。びしょぬれになるぞ。」

ザッバーン

「ヒヤ！？冷たい！」

「うー、びしょぬれや。ん？な、なんや！このバカでかいのは！」

「「「「「「ええええー！！」「」「」「」

海から浮かび上がったのは巨大な次元航空艦であった。青と黒を主体としたカラーリングである。

「XV級よりも大きいんじゃない？」

「また規格外なのが。」

「すげー。こんだけでかけりゃ隊舎の代わりになるわけだ。」

「あ、ハッチが開いたよ。」

「お、スペクトラだ。」

「よし、準備は整っているようだな。これより、荷物の搬入を開始するが、その前にこの艦の構造を簡単に説明する。上空のモニターを見てくれ。」

言われた通りに上を見れば艦の見取り図が表示されていた。それにはいくつかの矢印が写されていた。どうやら道順を示しているようだ。

「まず、船体後方は訓練場と倉庫になっている。食糧などは後方4番ハッチから。次に機材や書類は前方2番ハッチからだ。部屋割りには既に決めてある。誘導表示に従ってくれ。」

「分かった。ほな、みんな言われたとおりに行動するように。」

「「「「「了解!」「」「」「」

「あー、それからもうひとつ。」

「「「「「?」「」「」「」

「搬入後、総員ブリッジに集合する事。それからこの艦はでかい。迷子にはなるな。ちなみに以前三日間迷子になり餓死しかけた者がいる。気をつける。」



「『『『『『りよ、了解！』』』』』」

「では、俺はブリッジにいる。」

それからはまたもや上をしたへの大騒ぎになった。まず、スバル、キヤロ、エリオ、ヴィヴィオが迷子になり放送で誘導、シグナムが訓練場を見て模擬戦をしたがる、部屋が遠すぎて途中で疲れる者が相次ぐなど、てんやわんやの大騒ぎとなった。

二時間後ブリッジにて

「よし、どうにか終わったな。」

「もうへへへへや。」

「うみゃ〜。」

「早く休みたい。」

「まあ、各々疲れてるだろうが、もう少し我慢してくれ。」

「ハ、ハイ。」

「が、がんばります。」

「では、まずは全員にこのそれぞれの部屋のルームキーを渡す。こいつには発信機が組み込まれているため、迷っても大丈夫だ。それ

からこの艦は五階まであるが、各階五か所にゲートポートがある。違う階に行く時や自分の部屋の近くに行く時に使ってくれ。では、各員自分のルームキーを持ったら部屋で休んでくれ。以上、解散。」

この後、ルームキーを手に入れるために争奪戦が繰り広げられ（ゲートポートに近い部屋を手に入れるため）全員疲れ果て、部屋で倒れたのは余談にすぎない。

## 第十三話 引っ越し（後書き）

ストーリーは出来ていてもそれを文章にできない。ああどうしよう。

## 第十四話 恋話？

スペクトラ達の船への引越し作業の翌日、機動六課メンバーはブリッジに集合していた。

なお、このさいの集合時間は午前6時なのだが、実際に全員が集めたのは午前8時であった。なぜそうなったかというところ、ブリッジが遠かったのである。正確に言えば、ブリッジに行くためのゲートポートが遠いのである。なにせ一番遠い地点は2キロほど離れているのである。これで時間通りに集合しろというほうが無理な話である。

とまあ、そんなまぬけな話は脇に置くとして、現在の状況を見てもよう。

「よし、やっとそろったな。では、これから現在の状況を説明する。」

そついうのはスペクトラであった。ちなみに彼が喋っている間の遠すぎるなどの苦情などは完全に無視されていた。

「まず、この艦はアルクトスに向けて順調に進路を進めている。このままいけば、予定通りに10時間後の午前18時に到着する。次に魔獣達の動きについてだ。」

スペクトラの言葉に全員が息をのんだ。

「現在奴らは各地の無人世界に潜伏している。おそらく最上級達からの命令を待っていると思われる。なお、最上級達についてはいまだに反応を確認できない。まあ、とりあえず現状は奴らの動向を監視、有人世界に現れたら叩くという態勢をとる事になる。以上、説

明を終了する。」

そう言い、台から降りるスペクトラ。

「そか、なら機動六課は一部のメンバーは今までどおりの勤務を継続。手の空いてる者は監視作業の方へ、次元航空艦の操舵関係の資格を持っている者はこのままブリッジに残って作業を。では、解散。」

「なお、苦情などがある者は今この場で受け付ける。」

その発言になのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、ヴァイスを筆頭に部屋が遠い組が飛びついた。

「遠すぎるよ!」

「なんでなのは隣のじゃないの!」

「きつすぎるで!」

「そうですよ!」

「なんか恨みでもあるの!」

「さすがにきつい!」

・・・一人違つのが混じっているが、気にしたら負けである。なお、その苦情は魔導師は優先的に遠くにしたという事で決着がついたのであった。

#### 4時間後 4F はやての部屋

「なんだ、俺を呼びだしたと思ったら、全員集合しているじゃないか。」

現在、はやての部屋にはなのは達主要メンバーが集合していた。

「それで？要件はなんだ？」

「なーに、簡単な事や。な・ん・でギンガがいるんや？」

そう、何故かメンバーの中にスバルの姉であるギンガ・ナカジマがいたのである。呼びだしはそのためである。無論、はやての個人的な事である。

「ああ、ギンガもブラッドメモリーの試練を受ける資格があるからな。だから召集しただけだ。」

「「「「「ええええー！！！！」「」「」「」

「ギ、ギン姉！いつの間にメモリーを見たの！？」

「とというか、今名前で呼んだよね！？」

「どづい事なの！？」

ワイワイガヤガヤ

「おい、論点がずれてるぞ。」

質問がブラッドメモリーから何故名前で呼んだのかに切り替わったところによく切り出したスペクトラ。(ちなみにそれまでも切り出そうとしたがそのたびに一喝され今ようやく切り出したのである)だが、

「ちつともずれとらへん!」

「むしろこっちの方が大事だよ!」

「というか、さっさと教えてよ!」

「ええい、分かった。教えるからデバイスをしまえ。」

さすがに一同がデバイスを機動させ始めたため、そう言わざるをえないスペクトラであった。

「ほな、聞かせてもらおうか。」

「なに、簡単な事だ。一年程前から交流があるだけだ。」

「「「「「「ええええー!!!」「」「」「」」

「あのー、別にそっち系の意味は無いので、あんまり叫ばないてください。」

「そうだ。ただ単に一年前にグラナガンで出会って話があっただけだ。」

「「「「「で、出会って!!!!」「」「」「」

「ええい、同じ展開か。」

「ハア、どうしたらいいんだろう。」

「とりあえず、要件は済んだようだし、俺は帰るぞ。」

「あ、じゃあ私も。それでは。」

## 退室後

「絶対にアレは恋に発展するで!」

「でも、今の二人はエリオとキャラロと同じようなものですね。」

・・・二人の退室後、二人は絶対に恋をするというアホ臭い話が行われた。(エリオとキャラロはフェイトが連れていった)

## 5時間後

「そろそろか。ベガ、艦内全域に回線をつなげ。」

「わかりました。・・・ハイ、接続完了しました。どうぞ、兄上。」

ベガからマイクを受け取ると、ポリウムを最大にし、放送を開



始する。

「あー、各員に通達する。ただちに最寄のモニターにて、外を見る。繰り返す。各員……」

その謎の放送に各員が頭に？を浮かばせながら見ると、一同は驚きを隠せなかった。

T O B E C O N T I N U E D

第十四話 恋話？（後書き）

はい、なにか思わせぶりにしといてすみません。

## 第十五話 幻想の世界

そこは、まさに神話の世界だった。機動六課メンバーがその景色を見て思った事は全員同じ事であった。

そこには雨が降ったわけでもないのに空には虹がかかり、山は火山もあれば雪山や岩山も存在した。大地は緑に覆われ、所々に色とりどりの花が咲き誇り、さらには巨大な樹木が世界を支えるかのごとく存在している。そして、その世界には神話に登場する生物達があった。

それを見たメンバーはというと、

「おい！あれドラゴンじゃないか！？」

「あー！あれってユニコーンだよ！」

「あっちにケルベロスみたいなのいるよ！」

「え？ほんと？どこと？」

まるで、子供のようにはしゃいでいた。ちなみに隊長達は、

「あ？マンティコアやで！乗りたいな。」

「え、どーせならペガサスだろ、はやて。」

「む、あのドラゴン、強そうだな。」

「ふえ、すごいね！フェイトちゃん！」

「うん！そつだねなのは！」（ああ、ユニコーンの背に乗ってなのはと新婚旅行に行きたい！）

・・・一人変な事を考えているが、いつも通りである。（そうなのか？）

「どうだ？これがアルクトスだ。俺達がこの世界の存在を隠していたのは、この世界に生息する生物を密漁なんかを考える輩から守るためだ。」

「くくくくくなるほど〜。」「くくくくく」

「ベガ、せつかくだ、この付近を周回する進路をとってくれ。」

「そつ言つと思つて既に設定してあります。」

「そうか、では、諸君、しばし幻想を楽しみたまえ。」

それから一時間の間、艦は半径百キロほどを周回し続けた。それが終わったあとにメンバーがあわててやり忘れた仕事を片づけるために艦のあちこちを走り回るはめになったのは余談にすぎない。

#### 一時間後

「まもなく、俺達のアジトに到着する。各員は予定通りに下船の準備を整えたのち、ブリッジに集合せよ。」

スペクトラの放送を聞いたメンバーは仕事によりすっかり忘れて

いた予定を思い出し、再びあわてて準備をするのであった。

三十分後

「よし、全員そろったな。では、俺達のアジトをお見せしよう。ベガ、モニターに。」

「ハイ。では、どうぞご覧ください。」

モニターに映し出されたのは、巨大な城であった。

「……………ええええー！！！！」「……………」

「ちょ！？アジトって、お城やんけ！？」

「お前達はどこかの王族かよ！」

「じゃ、じゃはは。」

「すごい。」（ああ、あそこでなのはと結婚式を！）

「ちなみに人数分の部屋は確保してある。夜勤のメンバー以外は下船してもかまわない。まあ、こっちに残りたいのなら話は別だがな。」

「……………降りるに決まっています！！！！」「……………」

ちなみに、艦から降りたメンバーのうち、女性メンバーは中世のような城の内装や部屋にうっとりとし、逆に男性メンバーは落着

かない雰囲気になったらしい。

第十五話 幻想の世界（後書き）

フェイトがもう完璧に壊れた感じが・・・。

## 第十六話 薬

スペクトラ達のアジトである城（アムライラ城と言っらしい）に六課メンバーが到着した翌日、隊長陣とフォワードはスペクトラに案内され城の奥のある部屋に向かっていた。

「この先にある部屋で試練を行う。」

「けっこー奥の方にあるんだな。」

「重要な場所だからな。っと着いたぞ。」

そう言い、おもむろに部屋の扉を開ける。その先にあつたのは、

棚・棚・棚。その部屋はとにかく棚でいっぱいであった。なにせ、扉のある方にまで棚があるほどである。

「どんだけあるんや……。」

「なんか臭いぞ。」

「この部屋は薬部屋さ。この棚全部に薬草がある。」

「試練をここでやるのはそのためか？」

「その通りだ。前にも話したが試練を受けるさいには肉体にさまざまな傷ができる。いや、あれは傷というよりも呪いといった方が正しいな。」



「呪い？また大げさな。」

「いや、事実だ。なにせここにあるこのアルクトス原産の薬草しか効果がないのだからな。」

「「「「「「！「「「「「」

さすがに驚くメンバー。だが、たしかに限られた薬草しか効果がない傷を呪いと呼ぶのは的を得ている。

「さらに、薬草を調合し、その傷にあつた薬にしなければならぬ。それがわざわざここまで来た理由だ。」

「「「「「「「「「「「」

「しかも、ちゃんと調合したのを使っても試練が終わったあとにしばらく寝込むことになる。それほどのものだ。」

「・・・それほどのものなのか。」

「まさに呪いやな。」

「まあ、いますぐにやるわけではない。」

「「「「「「え？「「「「「」

「この試練を乗り越える覚悟のある者だけが来るがいい。いつでもやってやる。」

「そうか。ならば私が！」

「シ、シグナム！」

「もとよりリスクは覚悟のうえです。」

「だったらあたしもやるぜ！」

「ヴィ、ヴィータまで。」

「このまま奴らを野放しするわけにはいかなーからな。それに、はやてを守るためにもあたしは試練を受ける！」

「ならばそのベッドに。」

部屋の中央に最初からあった二つのベッドを指さす。それに腰かける二人。

「悪いが、試練の間は体をベッドに固定させてもらっ。そうしなければ薬を塗れないからな。」

ベッドに固定された二人。そして、ポケットからブラッドメモリを取り出す。

「では、始めるぞ。」

「うむ、やってくれ。」

「いつでもいいぜ。」

そして、二人に触らせる。途端に気を失う二人。

「シグナム！ヴィータ！」

二人に駆け寄り、手を握るはやて。

「・・・二人は大丈夫なんか？」

「それは二人しだい。それは俺達ではどうする事もできない。俺達にできるのは見守り、祈る事と、薬を塗る事だけだ。」

「なら、うちは二人のために祈るで！」

「そうか。では、残りのメンバーは手伝ってもらっぞ。俺達が指示した薬草を持ってきてもらっ。」

「私達じゃどれがどの薬草がかわからないよ？」

「その点は問題無い。棚には番号が降ってある。指示した番号の棚から薬草を一握りの量だけ持ってきてくれればそれでいい。」

「それなら私達でも手伝えるね。」

「そつだ。では、そろそろ始まる頃だ。各自、担当の棚を決めてスタンバイしてくれ。」

第十六話 薬（後書き）

やっぱりグダグダになる・・・。文才をください。

第十七話 試練 シグナム編(前書き)

遅くなつてすみません。

## 第十七話 試練 シグナム編

シグナム side

「どこだ？ここは？」

私は気がつくとも見覚えのない廃墟にいた。もともとはさぞ立派な町だったのだろう。瓦礫の所々にその面影が垣間見える。

「む、アレは私か。」

瓦礫の向こうには私がいた。そして、

「ム、少女が。・・・！？なにを！？やめる！」

向こうの私の前にポロポロの少女が現れ、なにかを言っていたがその少女を向こうの私はなんの躊躇もなく首を刎ねた。

「オイ！お前なんてことを！・・・オイ、聞いているのか？・・・！？」

私は向こうの私に触ろうとしたがその手は向こうの私の体をすり抜けた。

「・・・そうか。これは私の過去か。」

ならば納得がいく。これは過去に起きた出来事。ゆえになにをしても代わりはしない私の罪。

「これを見るのが試練なのか？」

『……人殺し……』

「!？」

私が振り返るとそこには先ほど過去の私に首を刎ねられた少女がいた。

『なんで、なんでお母さんを殺したの！お母さんがなにをしたっていうの！？ただお前に襲われた人を庇っただけで殺されなきゃいけないの!？』

「それは……」

おそらくこの少女の母親は過去の私が蒐集のために襲った魔導師を庇って殺されたのだろう。

『なんで、なんデナノヨーー!!』

「!?!」

突如、少女の首が伸び私に襲いかかってきた。

『ナンデナノヨーー』

「ここは逃gg……!」

私は逃げようとしたが、足は動かなかつた。いや、動かせなかつた。なぜなら

『『『ナゼダー』』』』

いくつもの手が私の足を掴んでいたからだ。

「この、離せ！」

『離スモノカ！才前は私ダケデナク家族マデー！！』

「お前達も犠牲s y！ぐあああああー！！！」

私を激痛が襲った。見たら、いくつもの首が私に噛みついていて。そして周りはいつの間にか瓦礫ではなく亡者が埋め尽くす空間となっていた。・・・この全てが犠牲者なのだろう。つまり、私の罪。

「ハアハア、亡者たちよ。私を殺したいのならばいくらでも殺すがいい。私はそれだけの事をした。」

直後に襲いかかる亡者たち。そして激痛。だが、死の感覚はいつまで経っても訪れない。



どれだけ時間が経った？それが分からなくなる程の時間が経った。だが、いまだに亡者は私に襲いかかる。当然か。数千年分の恨みがそう簡単に無くなりはいないだろう。

「……最後まで正気を保ち続けるというのか？ハハ、なるほど。気が狂いそうだよ。」

私はようやくスペクトラの言葉の意味を知った。遅すぎるか。

「一体後どれだけ耐えればいいんだ？」

「ヒヒ、そりゃ決まっているよ。お前が狂うまでだよ。」

「！？」

いつの間にか私の目の前に黒いローブに身を包んだ何者がいた。

「お前は何者だ？」

「さあね。自分でも知らないよ。それでも名乗るなら、そつだなアルヒトの悪魔といった所だね。」

「アルヒトの悪魔……」

「そつだよ。ヒト。そつだ、せつかくだからちよつとした賭けをしないかい？」

「賭けだと？」

「そつ。なーに簡単だよ。ただこの砂時計の砂が全部落ちるまでに耐えきれれば君の勝ち。狂えば私の勝ち。どう？簡単でしょ？」

「たしかに簡単だな。いいだろう。その賭け、やろうじゃないか。」

「じゃ、スタート〜。ああ言い忘れたけど砂が落ちるのはすぐくゆっくりだから。じゃ、それじゃーねー。」

そつ言い残し悪魔はどこかに行った。

砂時計の砂が残りわずかになった。おそらくあと10分程だろう。だが、

「さすがに限界だな。狂いそうだよ。」

私は耐えきれそうにない。

「……どこまでか。」

あの悪魔、私が耐えきれないギリギリの時間に設定していたようだ。……なんとずる賢い。いや、相手は悪魔だ。これくらいは予測できたはずだ。

「結局、気付けなかった私の失敗か。」

「アア、あと3分程だ。だが無理だろう。私という自我が薄れるのを感じる。」

「！」

消えゆく意識の中、私は右手を握られている感覚を感じた。この温かい手は主はやての……

「大丈夫です。あなたという守るべき存在がいる限り、私は大丈夫です。」

「そうだ。私が消えたら主が悲しむ。だから消えるわけにはいかない！」

そして、最後の砂の一粒が落ちる。

「ヒビ、君の勝ちだよ。じゃ、ここから出してあげるよ。」

突如として消える亡者たち。

「ハアハア。」

「ヒビ、たいした精神力だよ。」

「それはどうも。」

「その精神力に敬意を表して、私の素顔を見せてあげるよ。」

「！！！」

悪魔はローブを脱ぎ捨てた。そこにいたのは私だった。

「ヒビ、驚いた？じゃ、次はどっちが強いか決めよう。」

そして私にレヴァンティンを投げてくる。私はそれを手に取る。

「ああ、いいだろう。」

そしてお互い同時に斬りかかる。

「はああああー……!!……!!……!!」

そして世界は光に包まれた。

第十七話 試練 シグナム編（後書き）

後半がグダグダになった感じがするな！。

## 第十八話 試練ヴィータ編

あたしが気がつくくと周りは真っ暗だった。

「なんも見えねーな。てか、ここどこだよ？」

とりあえず360度見てみたけど、どこもかしこも暗闇だった。

「ハー、どうスー！」

いきなり背後から殺気を感じた。あたしはとっさにアイゼンを振り抜いた。

「でりゃー！」

グシヤリ

（よし！手ごたえ！）

「たくー体だれg・・・え？」

ようやく眼が慣れてきたのかだんだん見えるようになってきた。そして、あたしが振りむいた背後にははやての死体があった。

「は、はやて！おい！嘘だよな！？ちくしょう！誰が！」

「お前だ。」

「え？」

あたしが振り返るとそこにもはやてがいた。

「はやて？」

「ヴィータ、なんでなん？なんでうちを殺したんや！」

「ち、違う。」

「違うなんてあるか！なんでや！」

「ぐあー！」

はやては私に掴みかかってきてあたしの首を締めあげてきた。

（ぐ、なんて力だ。このままじゃ息ができない。）

グシヤリ

「え？」

なぜか、あたしの手は勝手に動いて目の前のはやてを殺していた。

「な、なんで？」

グシヤリ

今度は体も勝手に動いてアイゼンを振り抜いてまたはやてを殺していた。



「か、体が！」

あたしの体はまるで操られているかのように次々とはやてを殺していた。

「クソ！これは夢だ！そうだ！ブラッドメモリーが見せている夢だ！本物じゃない！」

そうは言うが飛び散りあたしの体に付く血の感触は本物だった。

「チクシヨウ！チクシヨウ！止まれ！止まるんだ！あたしの体！」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう、どれくらいだった？もう、なんにも感じない。はやてを殺した感覚もない。

「殺してくれ！いつそ殺してくれよ！」

このままずっとはやてを殺し続けるぐらいなら死んだ方がましだ！

(ヴィータ……)

「え？」

はやて？

(ヴィータ、めげたらあかんで！絶対に戻ってきてや！)

「はやて……」

一度眼を閉じ、そして開く。もう、惑わされない！

「はやてはこの世界にただ一人だけだ！だから、お前達は違う！でりゃー！」

そして襲いかかってきたはやてだけでなくその場を支配していた暗闇まで碎け散った。

「ハアハア、とんでもねー悪夢だぜ。」

あたしは世界が砕けた後の真っ白な空間に現れたドアをくぐって  
いった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6257m/>

---

魔法少女リリカルなのは 魔龍と幻獣と魔獣と

2010年10月14日21時52分発行